
アルケミスト幼児

ふんわり卵焼き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アルケミスト幼児

【Nコード】

N1265W

【作者名】

ふんわり卵焼き

【あらすじ】

稀代の天才錬金術師である嫁さんに怪しい若返り薬を飲まされ、肉体が幼児化してしまった元世界最強の剣士である主人公。同じく幼児化した嫁さん共々、元の姿に戻る為の薬の材料を集めるという名目で、冒険の旅に出ることになったとさ！

登場人物紹介（随時更新）

ソーイチ…♂

黒髪の黒瞳。

本人的にはクールを気取っているが、まだまだ子供っぽいところもあるお人好しな二児の父親。

実年齢40を超えるオッサン。妻と我が子命。

鍛冶が得意であり、彼が作る武器は安価でありながら質がとても良く、高価なものであれば貴重な能力が付与されるということで、闇市で高値で転売されている。

料理も達者で、暮らしていた村では高い人気を誇っていた。

巷では、その名を知らない者はいない程の伝説的英雄であり、世界最強の剣士。闘気や殺気を剣気に変換し、常軌を逸した様々な技を使いこなす。とにかく強い。

各国で絵本にもなっている。最終的な冒険者ランクは歴史上5人しか登録されていないブラック。

ギルドマスターになることを渴望されていたが、特に興味が無かった本人は本業主夫、副業鍛冶師として日々を気楽に過ごしている。剣の弟子が全員女性なので、実はかなりの好色なのではないかと噂されているのが目下の悩み。と言いつつ、実際は割とどうでもよかつたりする。

一人前になった弟子や冒険者を志す若者に自作の剣をプレゼントするのがマイブーム。

愛妻の策略に嵌り、結婚を強いられ、若返り薬を飲まされ、幼児に戻るという数奇な人生を送っている人。でも、当人は面白がっている。

セフィアの尻に敷かれている。

セフィア…♀

蒼髪セミロング。翡翠色の瞳。

三度の飯より錬金術、錬金術より夫と我が子が好き。家事のできない二児の母親。

暇さえあれば調合しているか、ソーイチに甘えている。

高名な錬金術師の家系の長女。滅多な事では動じない、かなりサバサバした性格。夫にだけはかなりアグレッシブに接する。

大陸史において、史上最高の天才と謳われている錬金術師。メルキユリオ大陸にて、ホムンクルスの作成に成功した唯一の存在。真正のチートキャラ。冒険者登録はしていないが、それでも有名な人。様々なオリジナル製品を生み出しては、家計の足しにと売りに出している。凄まじく高額だが、たまにオリジナルレシピも売りに出す。どちらも激しい人気を誇り、それらを求めて他の錬金術師や冒険者、住民の間で暴動に発展することもしばしば。ただし、本人は知らんぷりを貫き通し、後始末は他人（主に二代目ホムンクルス）任せ。ソーイチとは違い、弟子などとはとっていない。理由は「面倒だから」。

絶世の美女である為、人妻と知られながらも男達によく言い寄られる。あまりに煩わしいと、十八番のクラスターボムで纏めて消し飛ばそうとする危険思考の持ち主。

若返り薬で幼児に戻り、これで男達に言い寄られることもなくなる。と安堵していたが、今度はそっちの趣味の危ない人達に言い寄られる羽目になる。

錬金術の力を利用しようとする複数の組織から常にその身を狙われているが、夫が守ってくれるので特に気にしていない。

二代目ホムンクルス…性別不明だが、♂と仮定

銀髪。金色の瞳。

重度の中二病患者。単純に二代目と呼ばれている。自称、”最強に

して最恐であり、最凶”という3Sのホムンクルス。
結構イケメンのドM。戦術、治癒、空間etcあらゆる魔法を行使
できる。

誕生時、初めて発した台詞のウザさからセフィアに即行で処分さ
れかけたが、そのキャラの濃さを気に入ったソーイチに助けられる。
そのため、セフィアを絶対服従の対象、ソーイチをいつか倒すべ
き友と書いてライバルと認識している。ちなみに、子供は守るべき
対象。それ以外の人間は、ちょっとは使える虫けら、若しくはただ
の虫けら。

ホムンクルスは生まれながらにしてあらゆる知識を身に付けている
のか？というソーイチの質問に対し、「そんなワケない」と遠慮な
く一刀両断した張本人。

改良を加えられており、フラスコの外でも普通に生きられる。しか
し、寝るときは何故かフラスコの中。本人曰く、フラスコの中が一
番落ち着くらしい。

人間大の大きさになることも可能。材料としてセフィアの血液と
ソーイチの○○を使用している為、2人のうちどちらかに血を飲ま
せてもらうことが唯一の延命方法。

ちなみに、初代ホムンクルスは誕生と同時にセフィアがフラスコ
を地面に落として割ってしまい、即死滅。生存時間僅か3秒という
短命に終わった。

どこかの誰かに宛てた手紙（前書き）

この物語は幻操士英雄譚からキャラクターと地名を流用しています
が、同名のキャラクターでも性格が変更されている場合があります。
あと、この世界では幻操士が存在しません。さらに、冒険者のラン
クも英字ではなく色となっています。要約すると、舞台はあの大陸。
主人公は彼で、ヒロインは彼女。でも、ちょっと違う。これは、こ
んなお話があってもいいかも？というi fの発想から生まれた物語。
ってな感じですかねー。あっちと違って、こっちはあまりシリアス
な展開にはしない予定です。

どこかの誰かに宛てた手紙

皆さん、初めまして。もしかしたら俺の事を知ってるかもしれないその貴方にはこんにちは。

名前はソーイチといいます。剣術と鍛冶と料理が得意です。以後、お見知りおきを。

あ、ちなみに結婚してます。既に子持ちです。お嫁さんの名前はセフィアといいます。

これまでの経緯を軽く説明しますと、地球という星にある日本という国で学生をしていた俺は、ある日突然よくわからない異世界に飛ばされ、ワケもわからず魔物にべしゃんこにされかけたところを助けてくれた今の嫁さんと一緒に、元の世界に帰る為の方法を探して各地を放浪したワケです。

しかしまあ、なんといいいますか。ぶっちゃけてしまうと、帰る方法は見つかりませんでした。

というワケで、この世界で生きていくしかなかった俺は、これからどうやって人生を歩んでいこうかと深く思案していたところ、世にその名を轟かせる天才錬金術師である嫁さんに「勝った方の言うことを一つだけ何でも聞くという条件で、私と真剣勝負しろ」と、唐突に果たし状を突き付けられてしまい、旅に付き合ってくれた恩義もあるので致し方なく従ったところ、なんと嫁さん、クラスターボムというそれ一個で四方一里を焦土にさせる錬金術の兵器を持ち出した挙句、それを胸に抱えて自爆テロの如く突っ込んできた次第で、このままでは2人纏めてあの世行きだと焦った俺はなんとか嫁さんだけでも助ける方法はないかと必死で考えたのですが、結局右往左往することしかできず、覚悟を決めて身構えたところ、嫁さんは俺から少し離れた距離で突然立ち止ったかと思いきや、いきなり

クラスターボムを俺に付き付けるようにして翳したではありませんか。

……気付いた時には錐揉みしながら宙を舞っていましたよ。無論、俺だけ。

さすがは稀代の天才と謳われた嫁さん、手に持ったそれはクラスターボムと見せかけて、実は指向性の衝撃波爆弾というオチでしたよ。

いやあ、モン○ンでいうアカ○ト○ムのソニッ○ブラ○トを受けたハンターの痛みってこんな感じなのかな——なんて思っちゃったり。

そして、仰向けで地面に寝転がる俺に歩み寄った嫁さんは、いきなり俺と身体を重ねるように倒れこんでできたかと思いきや、うるうる涙目で「私をあなたのお嫁さんにしてください」などとのたまってきたりして。

なんていうか、わざわざ上目遣いを演出してくるあたり、策士だなあなんて笑っちゃったりしたワケですけど、まあ見事にノックダウンされましたハイ。

いや、マジあれはどうしようもないです。あれに抵抗できる男なんていませんよ絶対。それこそゲ○でも無理だと思っています。

とまあ、そういうワケで、勝負に負けた俺に拒否権なんて存在しないので、お返事変わりに適当に嫁さんをちゅっちゅしたあと、晴れて結婚しましたとき。めでたしめでたし。

んで、結婚したあとは男の子と女の子の双子の子供を儲けたり、押し掛け女房ならぬ押し掛け弟子ができたり、冒険者を引退して鍛冶師から武器の鍛え方を学んでみたり、一人前になった弟子が孫弟

子連れてきたり、一人前になった孫弟子が曾孫弟子を連れてきたり、息子と娘が冒険者になって家を飛び出したりと色々ありましたホント。

そんなこんなで、気が付けば結婚して20数年の時間が経っていました。

そして、今、俺と嫁さんは馬車に乗って旅をしています。とてもイタイ病気を患っているホムンクルスと一緒に。

今現在の俺と嫁さん、見た目が3〜4歳程の幼児になってまして、それが理由です。

絶賛、見た目は子供、頭脳は大人でございます。

何故こんな面倒な事になっているのかと申しますと、ウチの嫁さん自作の通称若返り薬を無理矢理吞まされたせいです。

40過ぎても見えた目は若い頃とほとんど変わらないクセに、どうして若返り薬なんて作ったんでしょうね。理解不能です。

勿論、若返りになんて興味ない俺は、怪しい薬に手を付けるつもりはありませんでした。

しかし、リビングでのんびりと剣を拭いていたところ、突然頬を両手で押さえられ、問答無用で口移しされてしまったのは抵抗のしようもなく……。

ちなみに、なんで嫁さんまで幼くなってしまったのかというと、俺に薬を飲ませる過程で自分も少し飲んでしまったのだとか。

ざまあと笑ってやったら、押し倒されて唇を奪われました。

閑話休題。

さすがにこれは若くなり過ぎたということで、嫁さんは一度元に戻ることを決意したのです。若返りならぬ老化薬を作る為に、その材料を手に入れようと再び旅に出ることになりました。

しかし、この材料がととても貴重な代物でして、滅多な事では手に入らないらしいのです。ということで、未だに一つも材料は手元にありません。

今は材料の情報を収集しつつ、魔物を倒したり、採取や採掘に行ったり、持ち帰った素材を嫁さんが錬金術に利用したり、嫁さんが作った錬成素材を利用して俺が武器を作ったり、立ち寄った街でそれらを売ったりして、まったりと薬の材料集めに勤しんでいます。

これはそんな俺達夫婦と1匹の、ゆるゆる物語になる予定です。

では、ごきげんよう。

敬具

どこかの誰かに宛てた手紙（後書き）

この世界の錬金術師は、鍋やフラスコなどの器材を使って調合する
オールドタイプです。

ハ○レンのような、掌叩いてビスケツトが一つ♪のようなニュータ
イプではありません。

第1話

錬金術師とは、それはそれはとてもスゴイ存在なのである。どのくらい凄いのかというと、もう何でもアリじゃね？ってくらい凄いのだ。

公式チートといっても過言じゃない能力を持つ人間。それが錬金術師であると覚えておけば、大抵の事には動じないでいられるハズ。納得できるかはともかく。

そんな夢と希望と少量の絶望が入り混じる職業として有名な錬金術師だけど、世間では国から認められて特別な免許証を持っているプロの錬金術師と、特に免許などは持たず独学で錬金術を学んでいるアマチュアの錬金術師の2タイプに分けられている。

ちなみに俺の嫁さんは国から課された試験をパスした正式な錬金術師。免許証はそれぞれが正答率1%以下のクソ難しい学科試験と、丸一日費やす実技試験を突破しないと貰えないものの、嫁さんは苦もなく合格したようで、錬金術の界限では天才扱いされて何かとちやほやされているようだ。

国家専属の錬金術師として、数多の国から破格の待遇で招聘されていたが、結局本人はフリーとして活躍する道を選んだ。理由は「面倒だから」らしい。

そんな彼女も一時期は子供達に錬金術を教えようとしていたようだけど、反面教師というか何というか……普段の母親の姿から錬金術にあまり良い印象を持てなかったらしい子供達は、全く乗り気になつてくれず、結局息子は俺から剣術を。娘も俺から剣術を。妻は我が子に構ってもらえず不貞寝という結末に終わった。

まあ三度の飯より調合を優先したがる彼女の自業自得と言えなくもない。でも、あれはさすがに可哀想だったかも。調合した傷薬や

風邪薬で多くの人間が助かっているという事実を知れば、子供達の印象も少しは変わるかもしれないけど――いや、暴動の現場に居合わせたら目も当てられないな。

「ソーイチい……」

唐突に紡がれた気怠るような声。視線を下に向けて、俺の左膝を臆面もなく占拠している我が愛妻を見つめる。

「なに？」

「街はまあだあゝ？」

御者台にだらしなく寝転がりながら、セフィアは両足をパタパタと躍らせる。どうやら退屈過ぎて、調合中毒を発症させてしまったらしい。まあ別段珍しいことでもないので、適当に相手をするのが一番だ。

「そうだなあ、あと少しかな？」

「それさっきも聞いたあゝ」

「さっきもそう答えたからね」

「ぶう……つまんなゝい」

頬を膨らませて不満をアピールしてくる俺の嫁さん、見た目は幼児の二児の母親。あらうんどぶおーていー。

「今、私の歳について考えたでしょう？」

「唐突に何を言うか」

「私の勘が妙な波長を感知した」

「そんな頭に悪そうなもん、すぐに廃棄しなさい」

相変わらず素晴らしい勘をお持ちだ。

上目遣いで睨んでくるセフィアの頭を撫でながら、思案する。これは憂慮すべき事態である。愛すべき妻の殺意を紛らわすには、どうするのが効果的か。

「仕方ないな。退屈なら、その二代目を八つ裂きにしてなさい」
「クククッ……少し待ってほしい、マイマスター。そこで僕に飛び火してくる意味がわからないのだが？」

馬車内の壁に吊り下げられたフラスコの中でクールな笑みを浮かべつつ、身体を震わせている性別不詳の小人は、セフィアが作った二代目ホームンクルスだ。末期の中二病を患っている、実に面白いあんちくしょうである。

「ん〜？ 二代目を切り刻んでもいいの？ 私がそうしようとする
と、いつも止めるのに」

「まあ場合が場合だし。二代目には申し訳ないが、人柱にならぬ小人柱になってもらおう」

話が決まり、むくりと頭をもたげるセフィア。それを見た二代目は大量の冷や汗を流し始める。

哀れな。そう仕向けた俺が言うなって話だけど。

「待ってくれマイマスター。マイロードは有言実行タイプの恐ろしい女性だ、マジで洒落になってない」

「嘆かわしいな。3Sのホームンクルスともあろう者が、創造主の退屈を紛らわせることもできないなんて」

「最強にして最恐、そして最凶である僕でも、多少の不可能はある」

あくまでも余裕があると見せかけつつ、震えながらに懇願する二

代目に心を打たれた俺は、喉の奥から漏れてきた欠伸を噛み殺した。

「んじゃあ、俺がフィーアの相手するから、その間御者やってくれ。それで妥協してあげよう」

「……了解した」

がっくりと項垂れてフラスコから出てきた二代目は、瞬時に人間の大人くらいの大きさに変化すると、御者席に大人しく腰掛ける。

ふふふっ計画通り！

手綱を二代目に渡し、セフィアを抱えて後方の客室兼貨物室に移動する。

適当な場所に腰を降ろし、近くにあった使い古してボロボロの大陸地図を手にとった。各地の街や村、それぞれの地域の情報がびっしりと書き込まれている優れものである。

この地図は俺とセフィアがこれまで積み重ねてきた経験をぎゅっと圧縮して、押し込めてある記録装置。じっと眺めれば、懐かしき過去の青春も思い出せるオマケ付き。日焼けして、何やら風格のようなものを漂わせているこれを再び手に取る日がやってくるとは、正直思ってたなかった。

さて、今のうちに現在地と目的地を確認し、今後の方針を纏めておかなければならない。

「えーっと、情報によるとレジンブルグ山脈のどこかでエーデルロアが咲いているらしいと……」

レジンブルグ山脈とは、皇国と帝国の国境にもなっている大陸最

長にして最も標高の高い山脈で、一帯には魔物の中でも最強を誇る種族として知られる竜種が数多く生息しており、有名な名付きの竜種も複数頭確認されている、大陸でも有数の危険地帯として知られている。

その山脈の山頂付近に希少な錬金材料であるエーデルロアの花が採取できるという情報が得られたので、こうして馬車で向かっているワケだけど……。

「カルセイデまでは、まだ大分距離があるんだよなあ」

カルセイデというのは山脈に面している街の一つで、良質な鉱石を多く産出している為、規模としては都市にも迫る大きさを有している。

だが、良質な鉱山を確保する為、山脈近くに街を置いたので魔物の襲撃が後を絶たず、気が休まらない街としても有名だ。

「確保してある食糧や水も乏しくなってきたし、村に立ち寄っておかないと。野宿もそろそろ限界だしなあ」

現在、俺と嫁さんはそのカルセイデを目指して旅を続けているんだけど、今日のところは途中にあるソロ村で宿をとる予定であり、馬車もそのつもりで移動させている。

多少遠回りになるけど、馬車に積み込んである物資は尽きかけており、子供に戻ってしまった今の俺達の体力で連日連夜野宿するのは厳しいものがある。よって、素直にそこは諦めるしかない。

「少し前までは連続の野宿でも平気だったのに……なんか釈然としない」

これまで自分の中にあるのが当然だと思っていたものが無くなる

感覚っていうのは、どうにも慣れない。いや、本来慣れるもんじやないとは思うけど。

日々の戦いの中でガチガチに硬くなっていた拳はふにゃふにゃのマシユマロみたいだし、コンマ単位で自由に動かせていた指先も不器用になってるし、二の腕もぷにぷにだし、俺のマグナムもミニマムサイズに退化してる。

体力は失ったし、腕力や脚力も体型相応にしか引き出せない。嫁さん特製のムキナールなる筋力増強剤でドーピングしなければ、剣も満足に持てないのだから。

人生の活力剤といっても過言ではなかったお酒も飲めないし、何よりご飯を食べるとすぐに眠くなる幼児特有の体質はかなり面倒臭い。

唯一の救いは、おつむまでも若くならなかったことだろうか。

「難しい顔して、どうしたの？」

地図との睨めっこに割り込むように、膝と膝の間に尻を収めてきたセフィアが、ぽすっと俺の胸に背中を預けて聞いてくる。

「んにゃあ、幼児というのはつくづく不便だなあと痛感していた次第ですよ」

「ちよつとちよつとー。聞き捨てならぬ。本来ならば子供に戻るなんて絶対不可能なのよ？ それを不便の一言で片づけることはないでしょー。若返りよ？ 若返りなのよ？ 私は全人類が欲して止まぬ神の御技を体験させてあげてるの。ソーイチはそんな甲斐甲斐しくも麗しき妻の努力に唾を吐きかけるといふか！」

「へえへえ、悪うござんした。貴女様が起こしてくださった奇跡は、あっしの身には過ぎた代物でやんすー。ありがたやありがたや」

「くそー！ 人を馬鹿にしてんのかー！」

ぷりぷりと両腕を振りかざして怒りをぶつけてくるセフィアを宥めながら、俺は思考を埋没させる。

この世界に住まう人類の平均寿命は、約130～140歳らしい。長生きする人の中には優に200歳を超えている人もいるとか。かなりの長寿命だ。

しかし、それは異世界の人間である俺には適用されない。元の世界での、俺が住んでいた国の平均寿命は約80歳。だが、これは医療が発達している先進国ならではの数値であり、この世界の医療レベルと照らし合わせると、恐らく、平均は40～50歳あたりまで落ちるだろう。

もし、この世界の医療技術が俺の国と同レベルまで発達していたなら、住民の寿命はさらに60～70年は伸びるハズだ。

——俺と嫁さんの寿命の差は、約3倍もある。

そんな話を昔、旅の途中でしたことがあった。そして、現時点で俺は40歳過ぎのオッサン。セフィアとは違い、既に老化の現象が始めている。

手紙では理解不能とか書いたけど、嫁さんがこんな暴挙に出た理由とは……つまり、そういうことなのだろう。

俺は彼女を残し、先立つ運命にある。ずっと一緒に、隣に並んで未来を歩むことは許されない。

それがわかっているからこそ、セフィアは逃れられない宿命から俺を遠ざける為に、寿命のリセットに踏み切ったのだ。

恐らく、この幼児効果は偶然ではなく、計算し尽くされた必然。

今回の旅で探すことになった錬金材料も、実をいえば老化の薬などではなく、同じ若返り薬の材料かもしれない。

……まあどうでもいいさ。愛する嫁さんと一緒にいられるのなら、旦那としてはそれで十分だ。

「ソーイチい？　おい？」

「うん？　どした？」

下から覗き込むように見つめてくるセフィアの瞳に、自分の顔が映る。

「なんかボーっとしてたから」

「これから先、後何年くらい生きられるのか考えてただけだよ」

「――……っ」

セフィアの表情が僅かに歪む。少しイジワルかもしれないけど、嫁さんのこういう顔が見られるのは旦那である俺の特権なワケで。

「ちくしょう！　可愛いなあもう！」

「うわぷ！？」

かいぐりかいぐり。愛しい嫁さんを抱き締め、その頭を撫で回す。頬を染めて、大人しくされるがままになっているところも、またカワユイのう。

「クククッ……マイマスター、イチヤイチヤしてるとこ悪いが、ソロ村が見えてきた」

二代目の台詞で一氣に現実に戻される。

宿を見つけなきゃならないし、そろそろ御者台に戻るか。

「……」

解放されたセフィアが名残惜しそうに指を咥えるが、今は我慢してもらおう。続きなら、後でいくらでもできる。

御者台に腰掛けた俺の隣に、少し肩を落としながらセフィアが座る。

『ハライセニアトデオシオキネ?』

途端に二代目の顔が蒼褪めたように見えたのは、恐らく気のせいではないのだろう。

「——ちょッ!? マ、マイマスター……宿なら僕がちゃんと見つけてくるから、も、もう少しマイロードとアバンチュールについてもいいんだぞ?」

「アホ言え。『虫けらが集る宿は好かんが、今回はここに泊ってやる。ありがたく思え』とかほざくような奴に、宿探しさせるワケにはいかないだろ」

二代目は無駄に偉そうな態度で人に接する挙句、虫けら扱いするから性質が悪い。この間、それが原因で実に面倒な憂き目にあったのだ。同じ過ちは犯したくない。

「クククッ……そ、そんなこともあったかもしれないな……オワタ!」

何やら1人で蒼い顔をしている二代目から手綱を受け取ると、馬

車を村の入り口に向ける。

そのまま村に入ったところで、周りの風景に目を配ってみた。

「小さい村だな。人の数もあまり多くはないようだし、若い人もあまりいないみたいだ」

「そうね。たぶん、若者はカルセイデに出稼ぎに行ってるんじゃないかしら」

荒涼というワケではないが、何だか寂しい村だ。なんというか、活気がない。

まあそこらへんの事情は、余所者である俺達には関係のないこと。とりあえず、通りすがりの女性に宿の場所を尋ねることにした。

「あの、馬車の上からすみません」

「ん？ どうしたの？ 坊や」

坊や、ね。この見た目じゃ、実は40過ぎのオッサンですって言うっても、信じてもらえないんだろうなあ。やっぱ複雑な気分。

「この村に宿泊できる施設はありますか？」

「宿屋ならあっちに一軒だけあるわよ」

女性はにこやかな笑みを浮かべながら指を西の方角に向ける。小さな村なので、曖昧な説明でも十分に見つけられそうだ。

「ありがとうございます。では、これで」

「はいはい。元気でね」

軽く手を振って去っていく女性を見送りつつ、馬車を宿へと向ける。

「んんっー！ やっぱり、この身体で長旅は辛いわ。さっさと宿で休みたい」

「そうだねえ」

昨日一昨日と連続で野宿だったので、さすがに疲労が蓄積している。ゆっくり身体を休めないと、明日の旅が持ちそうにない。

「久々のお風呂、楽しみ」

「今日は遠慮なしにお腹いっぱいご飯が食べられるなあ」

「クククッ……小さな村落の宿屋の質、とくと見極めさせ貰おうか！」

中二病な台詞を吐いた二代目をセフィアが冷たい眼差しで睨む。

「余計な波風立てたら殺すからね」

「……心に留めておこう。マイロード」

乾いた笑いが、馬車の中で虚しく反響した。

第1話（後書き）

補足..

この世界の住人は非常に長命ですが、幻操の方はあまり私達と大差ありませんのでご注意を。

冒険者ランクは最下級から

（下位）ブラウン ↓ グレー ↓ オレンジ ↓ イエロー

（中位）パープル ↓ グリーン ↓ ブルー ↓ レッド

（上位）ブロンズ ↓ シルバー ↓ ゴールド ↓ プラチナ

（特位）ホワイト or ブラック

となります。

実質的にはプラチナが最上級ランクであり、ホワイトとブラックはそれぞれ常人には真似できない特別な働きを見せた人に贈られる特殊なランクです。

第2話

嫁さんとイチヤイチヤしつたつぷりと英気を養い、万全の体調でソロ村を出発してから、早3日。

時刻はそろそろお昼時といった頃だろうか。順当に進んでいれば、そろそろ目的の皇国領カルセイデが見えてくるハズ。

窮屈な馬車での移動生活から解放されると思うと、手綱を握る手も緩んでくる。

「♪ ♪」

「耳にタコができるくらい聞いた曲だけど、相変わらず不思議な旋律」

元の世界でのお気に入りであった洋楽の曲を歌う俺に対し、セフイーアは隣で錬金術に関する本を読みながら、さして興味もなさそうに呟いた。

「えへへ、俺も未だに何言ってるのかわかんない」

だってカラオケで歌えるように歌詞を覚えただけで、英語ができるワケじゃないもの。……このやり取りも耳タコだ。

「……ご機嫌ね」

「クククッ……マイマスターの故郷は、国によって独自の言語が確立されている世界だったね。実に興味深い」

二代目がフラスコの中で恰好つけているが、華麗にスルー。興味深いなんて言われても、もう二度と戻ることは叶わないのだ。知識欲を満たしたい気持ちはわからないでもないけど、諦めてもらおうし

かない。

「あと少しでカルセイデに着くんだよ？　ご機嫌にもなろうってもんさ」

カルセイデに辿り着けば、そこを拠点にしばらくはエーデルロアの採取に勤しむことになる。お金は掛るものの、気の休まらない野宿や質素な食事からは解放されるワケで、そこは素直に嬉しい。

「カルセイデについたら、まずは宿とって昼寝だな！　もう眠くて敵わん！」

昨夜から寝ずの番で見張りをしていたのだ。幼児特有の体質云々の話ではなく、普通に眠い。

「お昼ご飯は食べないの？」

「起きたら食べる」

「あっそ」

短い会話のあと、セフィーアは再び本に視線を戻す。

嫁さんは「見張りなど知ったことではない」と言わんばかりにしっかりと寝ていたし、夜までは気ままに行動するつもりらしい。

彼女の事だ、どうせ空いているアトリエを借り受けて、ご無沙汰だった調査を心行くまで楽しむに腹積もりに違いない。

厄介な事にならなければいいけど、まあ仮に何か問題があっても、二代目^{げぼく}がきっちり務めを果たしてくれるだろう。ああ、何て頼もしい小人なんだ。

「クククッ……どうして僕の顔を見て微笑むんだい？」

「いやいや、気にするな。お前という存在の愛おしさに心を突き動

かされただけさ」

「……あまりに気持ちの悪いコトを言わないでもらえるか。身の毛がよだつ」

「失敬な！　せっかくホームンクルスの大切さを理解し、内心で感謝してやっていたというのに！」

「そうかい。どうして今感謝されているのか理由はわからないが、それが本音なら光栄の極みだよ。親愛なるマイマスター」

あくまでも皮肉と受け取っているのか、二代目は肩を竦めるだけで大した反応は示さない。ちえっ、ノリの悪い奴だなあ。

「……むうー！」

「どした？」

突然横から唸り声が聞こえたと思いきや、我が愛する嫁さんが頬を膨らませてこちらを睨んでいた。

怒られるような事をした覚えはないので、つい首を傾げてしまう。

「むううー！」

さらに語気を強めて唸るセフィアは、読んでいた本を貨物室へ放り投げると、不機嫌の理由をわかってもらえなかった不満を態度で表わすように抱きついてきた。そのまま、小さな頭をぐりぐりと胸へ押しつけてくる。「撫でろ」と言いたいらしい。

「はいはい、よしよし」

彼女は言葉ではなく、行動で要求してくる。

対応を誤ると、しばらくの間機嫌を損ねてしまい、手に負えなくなってしまう。というワケで、素直に頭を撫でてやった。

「……ん」

気持ち良さそうに目を瞑るセフィーアを眺めながら、思わず出てきた苦笑を引っ込めた。

大方、俺がホムンクルスを褒めたから、それを作ったのは自分だと訴えにきたのだろう。そんなことしなくても、ちゃんとわかってるのにねえ。この歳になっても堂々と嫉妬をアピールするとは、どこまでも愛くるしい妻である。

「——っと、ようやくカルセイデが見えてきた！」

視界の先に薄らと建物の輪郭が浮かび上がってきた。常に魔物の脅威に曝され続けてきたカルセイデ特有の堅牢な街壁は、対攻城戦用の大規模戦術魔法の直撃にすら数発は耐える頑丈な代物だ。その威圧感は、まるで戦場における大要塞を彷彿とさせる。

約20年振りに訪れるカルセイデの懐かしい景觀に、思わず頬が緩むのを感じる。

距離は凡そ馬車で1時間といったところだろうか。早く足を踏み入りたいものだ。

「私には見えないけど。でも、ソーイチがそう言うなら、間違いないんでしょうね」

俺の視力が常人と比べてずば抜けて高いことを知っているセフィーアは、いつの間にか俺の膝を枕に御者席に寝転がっていた。もう完全に甘えモードに入っている。

「カルセイデには久々に訪れるってのに、フィーアさんはホントに

己のペースを崩しませんなあ」

「騒いだところで、何か変わるワケでもないでしょ。無駄な体力の浪費は嫌いな」

嫁さんの蒼穹のように鮮やかな髪を弄びながら、カルセイデへ初めて訪れた頃の遠き過去に思いを馳せた。

「あの頃は目に映る物全てが新鮮だったなあ。若き日の思ひ出るぽろぽろ」

「その老いたおっさんみたいな言動はやめて」

「だって40代だもん！ 言い訳のしようがないくらい中年だもん！」

「事実だけど、幼児の見た目で言っても説得力ない」

確かに。

グウの音も出なかったので、腹いせにセフィアの耳に息を吹きかけてやった。

「ひゃうっ!？」

膝の上で悶える嫁さんは可愛かった。



『おい坊主共！ 早く逃げろ！ カルセイデはもうお終いだ!!』

カルセイデの街門に着いた途端に、知らないおっちゃんから怒鳴られた。それが皮切りってワケでもないんだろうけど、おっちゃんの言葉に続くように街から続々と馬車や人が溢れてくる。

他人を押し退けて我先にと脱出を試みる人々の醜い顔といったら……まるで汚物の濁流のようで気持ち悪い。

まあ原因はわかっている。魔物の群れの襲撃だ。街の中で蠢く無数の魔物の気配と、其処彼処からもうもうと天に上がっていく黒煙を見れば一目瞭然だろう。

でも、解せない。

「んー？ カルセイデにとっちゃ、こんなの日常茶飯事でしょ？
第二空挺騎士師団は？ 冒険者ギルドの連中は？」

第二空挺騎士師団とは、クレスティア皇国陸軍が誇る精鋭騎士団のこと。世界で唯一、皇国軍のみが所有する翔機船を移動手段として、空からの強襲制圧を任務とするとても手強い部隊である。

元の世界の空挺部隊のようにパラシュートを装備して降下とか生温いことはしない。ていうか、この世界にはまだパラシュートなんてないから当然だけど。命の保証が無いノーロープバンジーを敢行し、着陸の際は風系列の魔法でなんとかするという猛者達だ。

彼らはこのカルセイデを駐屯地として、魔物の襲撃から――より正確に言えば、山脈を挟んだアークレイム帝国軍を牽制する役割を担っている。

それにちゃんと魔物の撃退目的で、大規模な冒険者ギルドも設置されていたハズだ。

そんな彼らが、この事態を黙って見過ごすなんてことはないと思う。

『連中は未だに魔物と戦ってるよ！　だが、ヤツらの数が今までとは桁違いなんだ！　名付きの竜すら飛んでやがる！！　もうこの街はもたねえ！　ちくしょう、なんでこんなことに……！　坊主達も早いとこ逃げろ！！　いいな！？』

幼児がどうしてそんな事情を知っているのか、疑問に思う余裕すらないらしい。おっちゃんはペラペラと捲くし立てると、一目散に駆けていった。

……手荷物すら持たないで、彼らはいったいどこに逃げるつもりなのかな。一番近いソロ村だって、ここから馬車で丸三日はかかるっていうのに。途中で休憩場はないし、雑魚とはいえ、一般人には十分手強い魔物だって生息してる。脱出している人々が結託して村を目指すならともかく、バラバラに逃げてる現状、彼らが無事に生きていける確立は絶望的だ。

「名付きの竜、か。……面倒だけど、お相手致しましょうかね」

ここまで来て引き返すのも癪だし、何より美味しい食事とふかふかのベッドが俺達を待っている。尻尾を巻いての撤退は許されない。

「行くの？」

「うん。魔物を統率してるのは、間違いなく竜だ。そいつを殺すなり追い出すなりすれば、魔物達も山に帰るハズだし、ちょっと行つて暴れてくる」

「わかった。じゃあ私も準備して合流するから。気を付けてね」

無事を祈りながらほっぺにチューしてくれる嫁さん。

「あいよ」

俺は『いってきます』の代わりに嫁さんの柔らかなほっぺにチュ―を返し、手渡された【特製筋力増強剤】ムキナールを一気に飲み干す。

ドーピングは好きになれないケド、こうでもしないと幼児の身で剣は持てないから辛いところだ。

配合された成分による身体能力向上と若干の精神的高揚を確認し、俺は日本刀にとってもよく似た自作の愛刀を手にとって、馬車を降りた。

「よっと！ 身長より武器の方が大きいと、やっぱ動きづらいな」

俺の愛刀は刀身が二尺八寸もあり、通常の打刀と比べてかなり長い。それに幼児体型も加わり、さながら斬馬刀を携えている気分になる。抜刀するのも一苦労なので、最近では鞘に納めず、刀身に嫁さん特製の布を巻くだけに留めて、いざというときに備えている。本当は刀に対して冒瀆的な事はしたくないんだけど、背に腹は代えられない。

ちなみにこの刀は見た目だけの紛い物というワケでもなく、日本刀の製法とほぼ同一の手順を踏んでいる為、ぶっちゃけまんま日本刀と呼べる代物であったりする。

刀の製法なんて知識でしか知らなかった俺がどうしてこんな物を作れるのかというと、それは単純明快、その道では有名な鍛冶師である師匠に教わったから。なんでも、刀は師匠の家系に代々伝わる武器らしく、これを打てるようになって初めて一人前と認められるんだとか。

当然、その人に弟子入りしていた俺も、刀を自作できるように厳しく扱われましたとさ。

といっても、師匠が言う刀は西洋剣の柄に反った刃がくっ付きま

したって感じのよくわからないデザインなんだけどね。鞘も西洋風なデザインだし。そこらへんは築いてきた文化の違いとかが関係してるんだと思う。

閑話休題。

「二代目、フィアのお守は任せたぞ」

「クククッ……任された。我が魂と誇りに懸けて、不潔な塵共はマイロードに指一本触れさせないことを誓おう」

禍々しい狂気――を演出しようと必死になっている二代目。まああんな調子でも仕事はしっかりとこなしてくれるので、心配はしていない。邪気眼相応、結構強いしね。

「んじゃ、また後で」

一言だけ言い残し、駆ける。

幼児になったせいで思うように身体が動かなくなったとはいえ、これまで積み重ねてきた経験はしっかりと感覚として脳に刻み込まれている。

それを出来る限り肉体にフィードバックしてやれば、得意だった縮地法もなんとかやれないことはない。

あ、縮地法ってのは、所謂ファンタジーでいう瞬間移動術のこと。相手からすれば、『敵が一瞬のうちに消えて、気付いたら懐に入り込まれていた。何を言ってるかわからねーと思うがかっこあーるわい』的なノリ。

まあそれは置いておくとして、門衛がいなくなった街門を抜けて、街中に入る。そこで飛び込んできた光景は、なかなか凄惨なもの

で。

「結構、被害が大きいなあ」

軍と冒険者の精鋭を集めていただけに、魔物の死骸が山のように積み上げられているものの、人間側の被害も馬鹿にならないようだ。俺達ももう少し早く到着していれば、犠牲者も抑えられたのだけど……時既に遅し、か。

「だからって、後ろ向きになっていい理由にはならないケド」

強烈な殺気を背後から感じ、身体一つ分だけ横にずれる。

その瞬間、今まで身体があつた場所を一匹の魔物が通り過ぎた。

擦れ違い様にガチン！と凶悪に鳴らされた牙からして、『オレサ

マ オマエ マルカジリ』の尊い精神が窺える。

死角から急所を狙った奇襲、野生の動物らしい行動だ。

「レイジクリーチか」

爪で地面を削りながら、こちらを威圧するようにゆっくりと振り返る魔物の名前はレイジクリーチ。四足歩行の獣型の魔物で、約4mもの体軀を誇る獰猛な種族だ。

黒光りする硬質な表皮や白く濁った5つの眼孔、今にも千切れそうな口元の皮が怖気を誘う。

冒険者ギルドの間で、単独での討伐許可ランクがレッド以上と定められている、なかなか厄介な魔物である。4人以上6人未満のチームで討伐するなら、平均ランクグリーン以上推奨。

「お口の中が綺麗にならないうちに、もう次に手を出そうとか、とんだ食いしん坊さんだ」

奴の口の中にまだ食べ残しがあるらしい。もっちゃもっちゃと汚く咀嚼する度に、口元の千切れそうな皮の隙間から、哀れな犠牲者の鮮血が滴り落ちている。

魔物の群れは街の中心部へ集結していると読んでいたのだが、まだ残飯漁りに勤しんでいる輩も残っているらしい。

「こんなちっちゃいお子様もお構いなしにパツクンチョするつもりですかそうですか。なら死ね」

と言いつつ、あちらさんに食欲がなくても死んでもらう事に変わりはないはないんだけどね。

『——ガオオオオオッ!!』

もうお腹ペコペコ我慢ならんらしいレイジクルーチが涎を撒き散らして飛び掛かってくる。凄い速さだ。下位ランクの冒険者やそこらの雑兵では、視界に捉えることもできないに違いない。

俺は愛刀に巻いてある布を一息に解き、最小限の動きでレイジクルーチの突進をかわすと、刀を逆手に持ち替えて無造作に突き出した。

嫁さんオリジナルの特殊複合金属による黒い刀身が、獲物の肉体に抵抗なく吸い込まれていく。

自身の勢いだけで豆腐のように両断されたレイジクルーチは華麗に着地すると、数歩分よろめいてから地面に倒れ伏した。遅れて、亡骸から毒々しい色の血が盛大に噴出する。

「またつまらぬものを斬ってしまった……なんちゃって」

刀身保護用の薄紫色の布をマフラー代わりに首へ巻き巻きしつつ、
てへぺろ！

『——うっうわあああ！！？』

なんだよ！ 俺のてへぺろはそんなにキモイってか！？

……と、ふざけてる場合じゃないな。結構、洒落になってない悲
鳴だったし。

愛刀を脇に構えつつ、叫び声の主の元へ走る。

「ちちち近寄るんじゃないねえ！！ 薄汚い魔物風情が！！」

声が震えているものの、なんとか虚勢を張っている男の子——見た
目からして16〜17歳くらいの赤髪の少年は、海を泳ぐ魚のよう
に空中を舞う複数匹の魔物に対し、ぶんぶん和我武者羅に剣を振っ
ていた。結構良い剣持ってるのに、あれじゃ宝の持ち腐れだなあ。
勿体無い。

空を飛ぶ魔物の名前は、ピュルケー。人と鳥がくっ付いたような
女性体型の姿をしている。まんまハルピュイアのような怪物といえ
ば分かり易いかな。

単独での討伐許可ランクはイエロー。一匹の強さは下の中といっ
た雑魚だけど、御覧の通り、必ず複数匹の仲間とつるんでるので、
少し鬱陶しい魔物だ。

強大な力を持つ竜種に群れで纏わりついていることが多く、”凶
兆の先触れ”とも呼ばれている。

「くそっ！ 飛んではかりいしないで降りてこいよー！」

一向に降りて来ようとしなないピュルケーに吠える少年。

むう……装備からして冒険者っぽいけど……体捌きといい、剣筋といい、素人に毛が生えたか生えないか程度の腕前しかないらしい。あんな腕では、奴等の間合いに入った途端に、忽ち喰い殺されてしまうだろう。

『ケーツー!! ケケケーツー!!』

宙を飛び回りながら少年を翻弄するピュルケーも獲物の非力さを理解しているのか、せせら笑うように少しずつ包囲網を狭めていた。存分に怯えさせてから、遠慮なく臓腑を食い散らかす腹積もりのようだ。趣味の悪い奴らだなあ。

「さっさと助けて、次行かないと……って、お？」

少年を助けようと動きかけたその時、質素なロングソードを携えた少女が疾風如き速さで少年の前に飛び込んだ。

『――やあああッ!!』

裂帛の気合と共に繰り出される一閃。

一目見ただけで安物と判断できる剣の一振りで、謎の少女は少年を包囲していた3匹のピュルケーを瞬く間に斬り殺してみせた。

無駄のない動きで体力の浪費を極力抑え、尚且つ、剣を振るう腕に余計な力が込められていない。あのような見事な剣捌きを見たのはいつ以来だろうか。歴戦の剣士でも、彼女の動きを真似できる者などそうはいないに違いない。

……あれ？ つーかあの女の子、どこかで見たような――って、まさか？

「んなっ……!?!」

突然現れた少女の圧倒的な強さに度肝を抜かれたらしい少年は、茫然と地面に座り込む。

それを一瞥した少女は、軽く苦笑しながら言った。

「この辺りにもう魔物はいないよ。だから、落ち着いたら街の外にでも逃げてね。それじゃ!」

軽く会釈するように頭を下げた少女は、そのまま剣を収めて走り出そうとする。

「ちょ……まっ待てよ!」

それを少年が呼び止めた。

「はい? 何か用でも?」

「あ……えっと、その……」

顔を赤くしてどもる少年。なんとなく勢いで呼び止めてしまったといった雰囲気、焦った態度からぶんぶん伝わってくる。

小首を傾げる少女は、少しだけ顔を近づけた。

「——ッ! い、一緒に戦ってやるから、俺も連れてけ!」

赤かった顔をさらに真っ赤に染め上げ、飛び退くように慌てて立ち上がった少年は、どこかやけくそ気味に怒鳴る。

いやはや青春だねえ! にやにや。

少年の言葉を聞き、一瞬だけ驚いたような表情を形作った少女は、
「足手纏いになるから、結構です」

につこりと天使のようなほほ笑みを浮かべて、バツサリと一刀両断した。

「なっ!?! あしで……!?!」

言葉を詰まらせて、愕然と膝を着く少年。直球ストレートの弱者認定に、ぐうの音も出ないようだ。

……さすがにあれば可哀想だと思うけど、まあ隠しようのない事実だし、助け船の出しようがないなあ。

「それじゃあ、私もう行くね。バイバイ」

フランクな態度で軽く手を振った少女は、今度こそその場を後にすべく踵を返す。

何も言えない少年は、ちらりと彼女の背中を一瞥した後、項垂れた。

その時――

「ん? この気配は……」

嫌な空気の流れと大きな気配を感じ、俺はその方向に振り向いた。それと同時に、大地が大きく揺れる。

「な、なんだ!?!?」

「これはいったい……?」

まるで榴弾砲の着弾のような地鳴りが一帯を襲う。その想像を絶する衝撃の前に少年は悲鳴をあげてへたり込み、少女は周囲を警戒しながら状況の確認を急いだ。

——そして、少女がその強大な存在を察知すると同時に、2人の前に一つの試練が舞い降りる。

第3話

——己の理解の範疇を超えた現象、若しくは存在と邂逅した時、その人物が示す反応とはどういうものだろう。

ただ呆然とするか、現実から目を背けるか、一目散に逃げるか、果敢に立ち向かうか……。

いずれにせよ、導き出される結果は単純だ。……と思う。

「な……なんだよこいつ……」

つんつんと跳ねた特徴的な赤髪の少年は手に持つ剣を地面に落とし、魂が抜けたような表情で呟いた。

金属の乾いた音が、虚しく空気を震わせる。

危機的状况の中であっても虚勢だけは保っていた少年だが、目の前に鎮座する化け物が相手ではさすがに如何ともし難いらしい。

まあしゃーないしゃーない。

「ブレイズドラゴンか。美味しそうな臭いに釣られて、飛んできたワケですね」

少年と少女の前に降り立ったのはブレイズドラゴンという竜種。名付きほどではないにせよ、それでも十分な脅威として地上に君臨している。

手がない翼竜タイプで、体格も10m前後とそれなりに大きい。赤紫の硬い鱗で全身を覆い、生半可な物理攻撃は勿論、ある程度の戦術魔法すらも跳ね返す非常に手強い存在である。

竜種は基本的に冒険者単独で挑むものではないとされているけど、

一応の推奨討伐ランクはゴールドとなっている。それでも戦えるのは魔道士か魔法の心得のある魔剣士、或いは自らの殺気や闘気を剣気として扱える極一部の剣士くらい。

軍属の兵士が討伐に向かう際は、一番弱い竜種で魔道士一個小隊を含めた大隊規模の戦力で挑まなくてはならない。

まあブレイズドラゴン自体の格付けは竜種の中じゃ中の下ってところなんだけどねー。

『グルルル……』

野太い声帯から漏れ出る、どこまでも低い唸り声。竜が醸し出す、気が遠のくような威圧感。手練れの冒険者でも顔を真っ白に変色させて、戦意を喪失するに違いない。

意図したのかはわからないけど、舌舐めずりして2人を見据えている。どうやら彼……若しくは彼女も先のレイジクリーチと同様、お腹ぺこぺこらしい。鋭くも歪で巨大な牙の間から、だらしなく涎を覗かせている。きたねーなあ。

「……」

少女は厳しい表情のまま、鞘に収めた剣を再び抜き放つ。見事な身のこなしでピュルケー3匹を瞬殺してみせた実力者の彼女でも、眼前で自分達を睥睨している存在が強大な力を持つ竜とあっては、さすがに冷や汗は隠せないようだ。

「んーあの子1人ならギリギリ持ち堪えることはできるかもしれないけど、さすがに赤髪の少年を守りながらだと死ぬなこりゃ。それに、あんな駄作な剣でどこまで戦えるかもわからんし——お？」

食物連鎖の頂点に位置する魔物の圧倒的な存在感。それを全身に

浴びながらも、赤髪の少年は落とした剣を拾って構えた。

「へえ、立ち向かうだけの勇氣はあるのか。意外と見所あるね。でも——」

震える手で持った剣一本で何とかできるほど、竜は甘い相手じゃないよ？

『————！！！！』

ブレイズドラゴンの咆哮。耳にした生物を萎縮させ、平伏させる王者の轟に空気が振動する。絶対的強者の前では、人間など塵芥にも等しいと思い知らされるプレッシャーだ。

そして、それに応じた有象無象のピルケーが其処彼処から集結してくる。その数、ざっと20匹は下らないだろう。

まるで下僕を従えた王族の凱旋のようで、苦笑しか出てこない。

いやあ、強者と自覚してる証拠だね、あの仕草は。実に気に入らない。

そんなことを思っていたら、ブレイズドラゴンを前にして少年と少女が喧嘩を始めた。

「——ここは私が抑えるから、あなたは早く逃げて！！」

「な、何言ってるんだよ！ お前が強いのはさっき見たから知ってるけど、いくらなんでもこの数を相手に闘り合うのは無謀過ぎるだろ！？」

「そんな事言ってる場合じゃないでしょ！ あなたなんか一撃で——」

「そんなもん知るか！ お前が残って戦うってんなら、俺も残る！ このまま見殺しにはできねえよ！」

「冗談はやめて！ 邪魔なの！ あなたと一緒にいたんじゃ、生き残れるものも生き残れなくなっちゃうの！ さっさと消えて！！」
「く……っ！」

少年は致し方ないとして、肝心の少女にも余裕が無くなっているのは少しよろしくない事態だ。言葉もどんどん辛辣になってるし。

「ークソッ！ 俺だって、やればできるんだ！ うおおおおっ！！」

「ちよつと嘘でしょ！？ お願い、待って！！ 止まってえ！！」

少女の罵倒で意地になったらしい少年は、雄叫びと共に剣を振り被ってドラゴンとピュルケーの群れに突撃していく。

あーあー……自棄になっちゃってまあ。若いねえ。でも、見てて飽きないなホント。

「――邪魔だあああ！！！！」

気迫だけなら、竜にも負けない勢いで、少年は疾走する。そんな彼に向って、ピュルケーが牙を剥くのは必然というべきか。

「どけえええッ！！」

満足に刃筋も立てられていない斬撃。しかし、そんな未熟な一撃がピュルケーの首を跳ね飛ばすとは、当の本人も予期していなかっただろう。まあ見た限り7割はビギナーズラックなんだけどね。でも、残りの3割のうち1割は剣の性能。もう2割は……。

「えっ！？ 今の動きって――」

少年が自分の動きをトレースしたことを一目で看破した少女は、驚愕に眉を寄せた。

「……や、やったのか？ 俺が、コイツを？」

目を見開き、信じられないといった表情で己の剣を凝視する少年。はいはい喜ぶのはいいけど、魔物は空気読んでくれるほどお利口さんじゃないぜ？

『————！！！！』

ああほら、小賢しい真似をされてお殿様が怒ってらっしゃる。

咆哮の後、ブレイズドラゴンが少年を丸呑みにしようと大口を開けて迫る。大迫力だ。

「危ないっ！！」

「は……？」

その瞬間、我に返った少女が少年を突き飛ばし、庇う様に立ち塞がった。結末は……まあ言わなくても予想はつくだろう。

それを避ける為に、俺はここで一つ手を貸すことにした。

「——ッ！！」

殺意と殺気を混ぜて、相手を”殺した”というイメージを連想する。そのイメージを視界を通してブレイズドラゴンに直接に叩き込んだ。

『ギャオンッ！！』

あと頭一つ分で少女の上半身を噛み千切られるといったその刹那、まるで顎をハンマーでぶん殴られたかのようにブレイズドラゴンが仰け反る。

周りを飛んでいたピュルケーもボトボトと虫の死骸のように地面へ落ちていった。

——濃密な死という剣気を視界から直接脳に焼き付けたことで、魔物共に『自分は死んだ』と錯覚させたのだ。

「「……え？」」

何が起こったのか理解できないらしく、少年と少女は口をぽかんと開けて硬直している。むう……この程度で我を忘れちゃうなんて、まだまだひよっこだなあ。

今俺が用いたのは、睨んだ相手を一時的な仮死状態にさせる技。まあ込める殺気次第では、人間くらいなら本当に殺せちゃうケド。ちよっと応用すれば、相手を俗に言う金縛りにすることもできる。

閑話休題。

「はいはい。いつまでも固まってないで、動いて動いてー。お譲ちゃん、ドラゴンをエスコート、お坊ちゃんは周りの雑魚を始末してお譲ちゃんをサポート。どうーゆーあんだーすたん？」

手を叩いて2人の子供を促す。とりあえず俺が面倒をみるべきは……両方だな、うん。

「が、餓鬼だと！？ バカ野郎！ こんな危ないところを1人でう

ろついてるんじゃない！」

「ここは本当に危険な場所だから、早く安全なところへ逃げて――あれ？　その髪の色……」

魔物が跳梁跋扈する危険地帯で幼児が1人でうろついている事態に少年と少女は焦り覚えているようだが、それはとんだ時間の無駄である。

ていうかバカで。バカでなんだい！　せっかく助けてあげたのに！失礼なお坊ちゃんだぜ、まったく。

「談笑してる暇はないよ。もうすぐドラゴン起きちゃうからね。ほらほら、急いで急いでー。時間は有効に使いなさい」

俺の言葉を証明するように、ブレイズドラゴンがゆっくりと活動を再開する。だるそうに頭を振ってるところを見ると、まだ死の夢心地からは抜け出せていないようだ。

「ほらほら、お譲ちゃんはドラゴンの気を引いて引いてー。お坊ちゃんは雑魚がお譲ちゃんに向かわないように気張って気張ってー」

少女はまだ俺の存在が気になっているようだが、それよりもまずは目の前の魔物を倒す方が大事と判断したみたいで、一足飛びにドラゴンの頭へ飛び乗る。うーん……判断が遅過ぎる。

「はあっ！」

少女は呆けているドラゴンの頭上へ一気に剣を突き立てる。しかし、なまくらな剣とドラゴン特有の強固な鱗のせいで、致命傷にはならなかった。

ただ、いい気付けにはなったみたいで、我に返ったドラゴンは怒

りの形相で少女を睨む。

「こっちよ！」

この場所で暴れさせては少年の身が危ない。それを承知している少女は周囲に誰もいない場所へドラゴンを釣りつつ離れていった。その様子を見届けたあと、俺は少年に視線を移した。

「ほれ、お坊ちゃん。君はお譲ちゃんがドラゴンと戦っている間に、周りのお掃除だ」

「お坊ちゃんじゃねえ！ 餓鬼が偉そうに指図すんなっ！」

と言いつつ、少年は地面を転がっているピュルケーの首に次々と剣を突き立てていく。根は素直な子のようにだ。

そのまま半数のピュルケーを葬ったところで、残りが一斉に活動を再開する。

「うわわ！？ クソッ、もう目覚めやがったのか！」

どうしてピュルケー達が地面に転がったのか、その理由も把握していない割には順応力が高い。

うーむ、やっぱりこの少年、見所あるかも。

俺は少年の戦闘に手を出すつもりはなかったので、適当な家の屋根に上ると、そこに腰を降ろして見守ることにした。

「数が多過ぎる……こんなのいったいどうやって……」

次々と身体を起こして宙へ飛んでいくピュルケーの数に脅える少年。その足がどんどん重くなっていくのが傍目から見ても丸分かり

である。

「足止めちゃ駄目だよー。そのままだと、囲まれて完全に動けなくなっちゃうよー」

「でも、こんだけの数どうすれば……!?!?」

まだ10匹以上も残っているピュルケーを前にして、剣を構えながらも少年は狼狽する。むう……さすがにこれだけの数を1人で相手にするには、中堅くらいの実力者にならないと厳しいかな？

「やれやれ仕方ない。お坊ちゃん、耳を塞いでなさい」

「はぁ? ……よくわかんねえけど、わかったよ」

「うむうむ。物分かりのいい子は好きだよ。さて――」

フラフラと頼りなく飛んでいるピュルケー達には悪いけど、この少年の礎になってもらう為に、もう少しだけ辛い目にあってもらう。

「喝ッ!!!!」



街の中は酷い有様だった。無数の魔物が我が物顔で徘徊し、何の躊躇いも持たずに人を殺戮していく。民家はボロボロに破壊されて、多くの人々が軀となって果てていた。

「あのカルセイデが見る影もないなんて……」

ソーイチを送り出したあと、私と二代目も馬車を適当な場所に退避させてから、作り置きしておいた鍊金兵器を持って街に入ったの

だが……その惨状を目にした瞬間、言葉を失った。

「クククッ……まるで人間と魔物の戦争だな」

小人状態の二代目が、私の肩の上でくつくつと笑う。

これが彼のスタイルだっていうのは理解してはいるものの、これだけ悲惨な状況を前にして尚笑える神経には、さすがに不愉快を覚える。

「二代目、魔物が一番密集してる場所を探してきなさい。私達はそこへ向かうことにする」

「了解した。では、しばしお待ちを」

私の命令に頷いた二代目は空高く飛んでいく。上空から街を観察して、魔物の動向を調べるようだ。

帰ってくるまでそう時間は掛らないとは思うけど、少しの間でも生存者を探しておこう。もしかしたら、奇跡的に一命を取り留めている人がいるかもしれない。

早速、半壊した手近な民家に駆け寄り、中の様子を窺ってみる。

「――誰がいる？　いたら返事をして！」

返ってくるのは静寂だけで、誰の返事もない。

その家の住人はとくに非難した後なのか、埃だけが虚しく室内を舞っているだけで、人の気配はなかった。

気を取り直して次の民家に向かうが、そこには既に事切れた遺体しか残されておらず、その次の民家も同様だった。

「――ここも手遅れ、と」

魔物に食べられてしまったらしい夫婦と思しき男女の肉片に軽く黙祷を捧げる。

もしかしたら、この辺りには生きてる人間など残っていないのかもしれない。

……我ながら、ネガティブな思考だ。

「この街、復興は絶望的かも」

軽く辺りの様子を確認しているところへ、二代目が偵察から帰ってきた。

「戻ったぞマイロード。魔物が密集している地域を特定してきた。中央の広場だ」

「また都合のいい場所で群れてくれる……。行きましょう」

「待ってくれ、マイロード」

そう言って、民家から離れようとした私の服の裾を二代目が掴む。

「なに？」

「瓦礫の下から人の息遣いが聞こえる。どうやら子供が埋まっているようだ」

「なんですって!？」

——全く気が付かなかった!

「二代目! 早く瓦礫をどうにかして、助けてあげて!」
「言われずとも」

瞬時に平均的な成人男性の大きさに変化した二代目が、魔法の構築にかかる。

もし二代目がいなかったら、私は間違いなく子供を放置して、中央の広場へ足に向けていただろう。

……夫のように気配を察知することができれば、生きてる人をちゃんと見つけてあげられるのに。大事な時に限って無能になる自分が悔しくて堪らない。

「マイロード、子供を引っ張り出してくれ！」

風魔法を制御し、下にいる子供を傷つけないようにゆっくりと瓦礫を除けた二代目が叫ぶ。

私は意識を失っている子供をなんとか背負うと、急いで瓦礫から距離をとった。

救出した女の子には多少の擦り傷や切り傷があるだけで、特に目立った外傷はない。どうやら積み重なった瓦礫の隙間に運良く閉じ込めらることで、難を逃れたみたい。……よかった。

「ん、もう大丈夫」

「了解した」

私達の安全を確認した二代目は魔法の制御を手放す。

風の力で宙に浮いていた瓦礫は、力を失ったように地面へと落下した。

「この子連れて広場へは行けない。一度、馬車まで戻りましょう」
「マイロードの体格でその子を背負うのは大変だろう。僕が代わるよ」

「お願い」

女の子を二代目に託し、今度こそ民家を出る。

さて、この子を馬車に運んで手当てするのはいいとして、問題はその後……。

二代目の背中におぶられている女の子を眺めながら、悩む。

この子の両親は、ほぼ間違いなくあの男女の遺体だろう。ということは、この子は孤児になってしまったということになる。

私も一応、二児の母親だ。子供を無責任に放置することなんてできない。ましてや、他人に任せるなど以ての外。

「ソーイチと相談しないとね……」

助けた以上は、この子の処遇についてちゃんと考えてあげないと。このままでは、我が子を置いて逝ってしまった両親も浮かばれない。

それにしても、どうして魔物の大群が突然攻めてきたのか。そこがわからない。

カルセイデは山脈に住み着いた魔物にそれこそ日常茶飯事のように襲撃されていたけど、それでもせいぜい飢えた魔物が数匹、多くて数十匹徒党を組んでやってくるくらいで、こんな街を飲み込むような群れを成して襲ってきたことはない。

それ以前に、名付きの竜が街を飛んでいるって話も解せない。名付きは確かに人類の天敵というか、単体で小国を滅ぼしかねないくらい脅威的な存在だけど、彼らは揃って賢い。テリトリーを荒らしたり、攻撃を仕掛けたりしなければ、自ら進んで人間を襲うことはあり得ないはずだ。

何故なら、人間にとって最大の脅威が竜であるように、竜にとって最大の脅威は私達人間なのだから。

種族的に見れば、確かに人類は脆弱な部類に入る。それこそ、魔物を含めた動物の中では、底辺をうろつくような身体能力しか持ち合わせていない。

故に私達人間は、その知恵を振り絞って獲物を狩り、外敵から身を守ってきた。

でも、そんな弱い人間にだって例外と呼ばれる存在はある。私の夫だって、その例外の1人。……まあ彼の場合は、色んな意味で例外中の例外って感じだけど。

とにかく、食物連鎖の理をまるごとひっくり返すような、比類なき戦闘力を持つ特別な存在が人間にはいるのだ。

そして、そういった例外に多くの同類が滅ぼされてきたことを、名付きの竜はよく知っている——知っている、ハズなのに。

「……今となっては考えるだけ無駄、かな」

如何様な理由があったにせよ、こうなってしまうてはもうどうしようもない。皇国は国の命運を懸けて全力で討伐に臨むだろうし、名付きの竜は自らにとって害悪と見做した人類を片っ端から殺していくだろう。

結局、残るのは悲しみと憎しみだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1265w/>

アルケミスト幼児

2011年9月17日17時07分発行